

山本博士
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和九年一月一日發行

經濟論叢

第三十八卷第一號

(通卷第二百二十三號。禁轉載)

奉
呈

山本美越乃先生

執筆者一同

目次

尙書の虞夏書に見はれたる經濟思想

法學博士 田島 錦治 一

酒の專賣に就きて

法學博士 神戸 正雄 二

マールクスの認識論原理

文學博士 米田庄太郎 四

植民の世界史的意義

文學博士 高田 保馬 五

農業生産に於ける水平的分化と垂直的分化

經濟學士 八木芳之助 八

我國工業に於ける小企業の殘存に關する一研究

經濟學士 大塚 一期 一〇

資本蓄積率の差異と固定資本

經濟學士 柴 田 敬 一三

中央銀行兌換準備檢討

經濟學士 松岡 孝兒 一六

貨幣需要と貨幣の流通速度

經濟學士 中谷 實 一七

植民地時代米國の土地保有制度

經濟學士 堀江 保藏 一九

米國の對玖馬投資とその影響

經濟學士 長田 三郎 二七

免稅點以下の小額所得者	經濟學博士	汐見三郎	二四
經營學の基礎概念たる資本、企業及經營	經濟學博士	小島昌太郎	二六〇
世界科學に就て	經濟學博士	作田莊一	二七六
漁村更生策に於ける問題	經濟學士	蜷川虎三	二九五
人口粗密の原因觀	法學博士	財部靜治	三五
徳川時代における植民的思想	經濟學博士	本庄榮治郎	三九
ヘーゲル市民社會論と經濟學	經濟學博士	石川興二	四九
恐慌と蓄積と植民	經濟學博士	谷口吉彦	五九
北海道鯨漁業に現存の漁場貸借關係	經濟學士	岡本清造	三四
我國に於ける植民政策學の發達	經濟學士	金持一郎	四七
クレルウキアに就いて	農學士	若木禮	四〇
山本美越乃博士年譜及著書論文目錄	經濟學士	高木眞助	四七

世界科學に就て

——國民科學と對照せる世界科學の地位——

作 田 莊 一

世界科學と言ふ名稱を聞く人々は恐らく奇異の感を懷くかも知れない。社會學の如きも始めには異様に見られたであらう。されど現代に於て已に世界生活を營む我等がこれに就ての科學を持つと言ふことは、何も不思議なことではあるまい。尤も今日、世界科學の成立を説くことは時機尙早の感がないでもない。蓋しこゝに世界科學と對照して見る所の國民科學でさへも、容易に學界の承認を受け得るとは思はれないから。國民科學の成立に就ては、近く國民精神文化研究所紀要に於て所見を發表することになつてゐるが、こゝでも世界科學の地位を明かにする必要からその點にも言及したい。

國民科學は國民生活を研究の對境とするが、世界科學は世界生活を研究の對境とする。これまで世間生活又は團體生活——西洋の表現で言へば社會生活——に就て試みられた科學的研究は、個人主義の立場をとる個人科學と階級主義の立場をとる階級科學とに過ぎなかつた。而かも最後

に出た無産階級科學は新興科學として最も力強い地位に立つてゐる。然るにこれらの諸科學では個人生活又は階級生活の問題を解明し得るとしても、國民生活及び世界生活の何たるかは了解し得られない。殊に最近時に見られる國民主義の劃期的復興に對面しては、從來の諸科學は甚しく無力なることを曝露した。例へば日本やイタリーやドイツの國民主義活動をば單に反動に過ぎぬと片付けて見た所で、それは何の現實解明にもならない。これらの現象を解明するには、必ず國民生活を研究對境とする國民科學に據らなければならぬ。されど大戰後に於けるこれらの國民生活現象は單に國民性格のみでは理解が出来ない。そこでは解明の範圍を更に世界的規模に互る世間生活にまで廣めなければならぬ。この點に於ては國民科學を以て足れりとしなない。蓋し世界生活現象は諸國民生活現象の綜合されたものではなく、これらを包容しながら而かも超越せる自立的存在に外ならないからである。この世界生活に對しては別に世界科學の建設を必要とする。

二

世界生活と言ふは、人々が國民として及び個人として世界的規模に於て相互に或は共同して無限定の生活目的を實現し居れる境涯を指す。人々の生活境涯は長い間、國民生活に止まつて居たが、それが在內生活から對外生活に延長され、對外生活の結ばれる所に新たに世界生活を加へるに至つた。世界生活は諸國民生活の構想的綜合ではなく、それ自ら存立する所の一の實在である。例へばこれこれの國民がかくかく動いたからと言ふだけでは、世界經濟恐慌は理解され得な

い。されどその逆に世界生活が實在する以上は、國民生活はその中に解消されると見るも大なる誤解である。例へば日本の皇國主義者、ロシアのボルシエヴィキ、イタリーのファシスト、ドイツのナチス等の國民的活動の如きは孰れも固有の國民性格から發生するものであつて、これらの由來を世界生活過程から説明することは出来ない。斯の如く各國民はそれぞれ特有の生活相を具へるが、同時に國民生活の一面は相互に或は共同に結合されて同一の生活境涯に入つてゐる。これは國際生活である。

また國民生活に就て見るに、人々は如何なる場合にも國民の一人たる身分を失ふことはないがその行動は必しも悉く國民生活に限られる譯ではない。經濟・學問・藝術・宗教などの生活部面に於て方向を同ふする個人が、國境を越へて相互に或は共同に連結されてゐる事實もまた看過され難い。勿論國民生活は國家統制の下に立つ人々の生活境涯であり、國家統制は可能的に、更に必定的に、國民たる人々の總ての行動に及ぶも、現實的には必しも一切に互るものではない。必定的であつても未現必定に止まり現實の統制が行はれない所に於ては、國境を越へて行はれる個人間の交通生活が萬民生活として存立する。國家統制が現實的に擴充されるれば、それだけ萬民生活は縮少する。萬民共產主義を標榜して起つたロシア・マルキシストも實際には却つて國民主義を執り國家統制を現實的に擴充したから、ロシア國人は各國の中で萬民生活に参加することを最も厳しく制限されてゐる。近時他の諸國民でもまた國家統制が次第に擴大されつゝある。されど

萬民生活を營む餘地は尙ほ殘されてゐる。國民生活と國際生活との間には何にも本質的な矛盾はない。蓋し國民生活の聯結が國際生活であるから。但だ何處まで國民生活を國際生活に参加させるかの限界に就て數々問題を生ずるも、この場合にも國際生活の擴大は必しも國民生活の削減とはならない。世間では國民主義か國際主義かなど唱ふる者もあるが、これは國際生活と萬民生活とを取違へてゐるのである。萬民生活となれば明かに非國民生活であるから、その進展は國民生活の縮少となり、個人科學や階級科學の如く萬民主義を執るときは國民生活を否定することとなり、國民主義を徹底さすれば萬民生活を拒絶することとなる。

萬民生活は許されたる——或は數々秘密に行はれる——非國民生活であるが、かゝる生活境涯は決して遊離してゐる世間生活ではなく、國際生活の輪廓の中に自然に發生せる一の世間生活層である。この點は恰も古代國民生活から近代國民生活に移るに當つて、國家の領域内に自然に市民社會が發生したることゝ傾向を同ふする。また萬民生活はそれ自らの統制を持たないで、全く社會自然力の制御の下にある。この自然生活層に對して統制を加へるものは國際團體の權威である。この統制は今尙ほ粗放極まるものであるが、ともかく意識的なる存在となつてゐる。謂ゆる世界經濟恐慌は主として萬民經濟層に起つた現象であるが、萬民社會はこれに就て無意識であり恐慌をどうしようとも考へない。その時に恐慌對策を講ずるものは國際團體である。尤もこの統制作用が最近ロンドンに於ける國際經濟會議のやうに無殘な失敗に終つたとしても、それ故に統

制の存在を否認するには及ばない。國家の統制でさへ國內の失業を克服するは容易でない。ましてや微弱なる國際統制力が暴風的な恐慌の前に無能であることは寧ろ當然であり、却つて失敗とか成功とか言ひ得ることは意識的な統制作用の存することを語るものである。

國民團體は領分國家と市民社會との二層から成り、國家が自ら經營を行ふと同時に社會を統制することによつて國民生活を團體生活たらしめる。これに對照して世界生活には國際生活と萬民生活との二層があつて國際團體が自らの生活内容を持つと同時に萬民社會に微弱ながらも統制を加へてゐるが、これによつて世界生活も一の團體生活となつてゐる。勿論、國民團體生活と世界團體生活とは、一が統合的組織であり統一體系を成せるに比べて、他が聯合的組織であり統一體系を成すに止まり、そこには生活内容の粗密が甚しく相違するのみでなく、組織の質の相違さへ存してゐる。しかしそれは二つの基本團體生活を同時に並び存せしめ、國民生活と世界生活とを二つながら實在として承認せしめ得る所以である。要するに世界生活は國際生活と萬民生活との二階層から構成され、微弱ながらも無統制の状態を脱して一體の生活體系にまで進出し居る所の世間生活である。最近には國民主義が復興し來つて世界生活を抑制するかの如く見える。しかしこれは世界大戰前に、國民生活の充實を怠つて萬民生活の擴大に進み過ぎたことから來た反動である。この輕率なる萬民生活の進行は主として階級生活の増進に因る。かくて大戰後には國民生活に反省時代が來り、近時の反動せる國民主義は過去への逆轉ではなく、國民生活の安立を念する

反正であり更新である。國民生活の安立はまた新しい國際生活への改造となり、更に新しい萬民生活への許容となる。國民生活を破壊するやうな世界生活は伸び得ないが、それと並び立つものは現實に存するのみならず、また發展する。我等は國民生活の意義を充分に承認しながら、而かも國民生活のみにては覆ひ難い廣大唯一の世間生活が實在することを明確に承認しなければならぬ。

三

かくて我等の世間生活には國民生活と世界生活との分界があつて、一方があれば他方はあり得ないと考ふるは謬つてゐる。この二通りの世間生活は常識でも一應は認め得られる。人々は口に國民道德を唱へ世界經濟を語る。然るに不思議に考へられることは、これまで専門的に世間生活を研究する科學では、地誌的には國民とか世界とか言ふも、却つて生活體系としての國民生活や世界生活やを否認してゐることである。その科學と云ふは個人科學及び階級科學である。

個人科學と言ふは個人主義——個人自由主義及び無政府的個人主義——の世間科學、即ち個人意志の立場から世間生活を觀察し思索せる觀念體系である。個人科學は世間に於ける各個生活を知るには適當してゐる。個人意志の立場からは先づ自己生活を知り、次に同情によつて自己の意志を他人に移入し代位せしめることによつて他人の生活を知り得る上に、最も進んだ所では個人生活の關聯せる状態を知ることにも出来る。しかし唯だそれまでである。個人生活の交渉が一定の密度に達し、個人を超越する總體の生活體系をなせる所になれば、個人科學の眼光は已に朦朧と

なり、正面の對境は雲霧に包まれて見えなくなつて來る。そこでは推量に過ぎない類推を試みたり、統計方法や數理的方法を用ゐて暗中摸索を企てる。しかし國民生活のやうな總體生活は個人を包容して而かも超越せる一體性の生活體系であるから、個人意志の立場からはこれを發見することは出來ない。常識で見得た國民生活も一旦個人科學の手に渡されるときは、國民生活や國家などは個人生活の方便となつて了ふのである。近代歐米の世間科學者の多くは個人主義認識論を執つてゐるから、彼等の眼鏡には國民生活が映じて來ない。例へば國民經濟生活の觀察に就て言ふも、アダム・スミスは近代國民統一主義によつて具體的・事實的に成立した「國民の富」を發見し、國民經濟學の父となつた。然るに繁榮せるイギリス國民生活は彼以後の學者を甘やかした。リカルドに至れば已に「政治經濟及び課税の原理」に於て「國民の富」を二分し、その後の人々は經濟學より別に財政學を分離せしめ、前者では共同經濟たる財政を抽き捨て、後者では財政を國家の家計的行政と見るやうな偏見に陥つた。ゾンバルトの如き、自然科學的經濟學に對して精神科學的經濟學を主張する人ですら、國民經濟は實在しないと謂つて居るほどに、個人主義觀の偏見が深く浸潤してゐる。以上のやうに個人主義の考へ方からは國民生活の實在は認め得られないが、已に國民生活を知らない個人科學としては、生活體系が遙かに粗放なる世界生活に就て一層無知であるべきことは蓋し當然であらう。世界經濟の如きは世界生活の内容として最も豊富なるものであるが、個人科學者達は一體の生活體系としての世界經濟を見出し得ない。

階級科學は個人科學に比べると遙かに世間生活の真相をよく認めてゐる。階級科學——有産階級科學及び無産階級科學——と言ふは階級主義の世間科學、即ち各階級意志の立場から世間生活を觀察し思索せる觀念體系である。階級科學は階級生活を知るには適當してゐる。これによれば支配階級對服從階級の關係を明かにするによつて、個人科學が見るやうな個人生活の關聯以上に、世間生活の現實の認識に接近し得る。されどこの科學では社會的存在が二階級の對立構成である所まで認め得られるに止まり、その先きに見られる所の國民生活の一體的存在に至つては、もはや認識の缺乏を餘儀なくせられる。二つの階級科學は共に國民生活を無視してゐる。一はこれを忘却し、他はこれを咒咀する。蓋し階級意志の立場から見るとは、國民生活體系をばその構成の一方から見ると過ぎないから、肝要なる生活體系の中心を見失ひ従つて體系そのものの全面を展望するを得ないのである。階級科學が如何なる事情から成立し且つ如何なる貢獻をなしたるかに就ては、決して無關心であつてはならぬ。されどそれらが國民生活に了解なき點に就ては、個人科學と何の擇ぶ所はない。

斯の如く階級科學は國民生活を知らないものであるが、世界生活に就ては個人科學と違つて相當に廣い眼界を持つてゐる。階級科學の中でも、有産階級科學は個人主義觀の變質せるものであるから、目當は何時も個人生活の關聯以上には出てゐないが、資本經濟が世界的規模にまで廣まつてゐる現代にあつては、個人の關聯を世界大に擴張して見るやうになつた。しかし唯だそれま

であるから、世界生活體系に出現する恐慌や戰爭に就ては決して本質理解には達し得ない。無産階級科學となれば、階級對立をば社會的存在の基本と見てゐるから、その見地からは已に國民團體を眼中に置いてゐない。國民生活を基本的存在と見ないとすれば、現代の世間生活、殊にその土臺をなす經濟生活は、世界的商品の流通する場面となつてゐる自然境に關心を集注する外はない。その意味の世界生活ならば、國民生活の自然境と別に本質を異にするものではなく、ここかしこの水溜りが相通じて一の大きい池をなしたに過ぎない。國民生活體系を知らないものは、同時に世界生活體系をも知り得ない。

世界生活と言ふは、單に地球上一面に互る人々の交通關係や階級對立を指すのではなく、世界の人々を一團となし、その中にて無限定の生活目的を實現する所の行動體系を指す。それは行動體系であるから、それ自らの力によつて動き、一々の國民及び個人は世界總體性の力によつて動かされる。世界生活は世界團體生活であり、團體生活は組織を具へ運營をなす。かゝる特定の存在としての世界生活は決して國民生活を解消せるものではなく、また國民生活を包容するとも、その團體生活を團體として包むのであつて、團體の内部の組織及び運營に立入るものではない。世界生活體系が存在すると同時に、國民生活體系も嚴然として固有の存在を保持する。否寧ろ二者の並び存することが各者の存在を認めしめる所以である。世界生活の發生以前にも國民生活が存在して、統一の完成に向つて進みつゝあつた。その時に國民生活に對照されるものは個人生活

であつた。國民生活が個人生活を總括的に包容せる時は、それが統合體系としての存在を明確ならしめた時であるが、その時にはその統合體系に對して聯合體系としての世界生活が現はれ來つた。この二者は概念的には總體生活と言へるが、これには等しく概念的なる各個生活が對向し、その中に國民的各個生活と世界的各個生活とを別ち得るのである。己を知る者にして始めて世の中を知り得る。國民生活を知る者にして始めて世界生活を知り得る。國民生活の實在を承認しない階級科學の見る世界は、畢竟地誌的世界に過ぎないで、特定の世間生活としての世界ではない。世界生活の研究に就ては、我等は個人科學と共に階級科學をも惜みなく捨てる。たとへ我等は後者が世界生活研究に貢獻する所の幾多の貴重なる業績を受容するとしても。

四

個人科學及び階級科學は國民生活及び世界生活の實在を認め得ないが、それは如何なる理由であらうか。個人科學は個人意志の立場から世間生活を見るが、かゝる管見では國民生活や世界生活の如き巨大なる生活體系を見渡すことは出來ない。また階級科學は階級意志の立場から世間生活を見るが、階級眼は世間を二分して各その一を見るのであるから、眼界の廣さは個人眼よりも遙に優るとしても、尙ほそれが見渡し得る場面は部分的である。殊に階級對立觀は世間生活を見る場合の目當となる中心を見失ふから、その目當の所から放射する全面の光景を見渡す能力を缺ぐ。勿論、階級對立は靜止狀態ではなく、有産階級の支配時代には無産階級が默從し、無産階級

の意志發生後には兩階級の意識的對立となり、更にこの意志の成長は支配階級の交替を來たし、またかゝる階級對立の發展に伴ふては階級科學の支配的地位も交替し行くと考へられる。それは階級生活を見る科學としては許され得る。されど若しそれが信賴せられる唯一の世間科學とするならば、二階級の勢力が對等に立向ふ期間には我等の世間科學は半分の眞理を持つ二つの科學の突合せとなるであらう。またそれならば、何時かは階級對立が解消されるであらうが、その時は世間生活に對する科學的研究は果して如何なる認識論的根據の上に立つであらうか。今日のロシアと雖も、無產者獨裁政府が有產階級を抑壓する現象は無產階級科學によつて説明し得られるとしても、同じ政府が國民生活の更新的統制の下に何年計畫を實行する事態は、果して有產階級科學を批判する任務を以て生れたる無產階級科學の能く解明し得る所であらうか。要するに階級科學は右眼又は左眼の一眼を以て見る偏見の故に、兩眼にて正しく視野を調整するとき始めて眼前に展開される全面の光景はそれらの科學には封ぜられてゐる。是に於てか從來の個人科學の管見と階級科學の偏見とを以てしては見ることの出來なかつた光景を望見する爲に、他の二つの科學の成立が要請されて來た。

國民科學は國民意志の立場から國民生活を觀察し思索する世間科學であり、世界科學は世界意志の立場から世界生活を觀察し思索する世間科學である。凡て研究對境を見るものは必ず意志であり、對境への認識は意志の自覺内容たる意識から出發しなければならぬことは言ふまでもない

ことである。動物が知る場合の本能的な感覚知では自體意識から出發する觀念體系としての科學は成立しない。學問研究の主體は常に意志である。科學研究に於て意志が意志以外に立つ地物自然を見る場合には、單純に人間意志の立場から見ればよい。されど意志が意志を見る場合には、必ず見る意志と見られる意志とが適應し、認識への出發點が主客同一の意識でなければ、正しい認識は成立しない。その適應と言ふは、見る意志が見られる意志に即く所の意志であることである。そこに認識の主客に於ける同一の意識が存する。自己の個人生活を見るものは自己の個人意志であり、他人の個人生活を見るときは自己の意志を他人に移入せしめて代位せしめる。階級生活を見るときは階級意志で見ることが、この場合には階級は對立し對抗してゐるから、一の階級意志を他の階級に移入し代位せしめてその階級生活を知ることが困難である。個人は並立するから、一人に就てはその人の自己認識とその人に深い同情を持つ友人からの認識とは一致する可能性がある。されど各階級生活の自己認識と他階級からの認識とは一致し難い。二つの階級が孰れも意識的に對抗し居れる現實の世間生活に對しては、二つの相容れない階級科學が對抗し、従つて團體生活に對する觀念體系は二つの陣營に分裂する。それでは總體性を持つ團體生活への正しい認識は成立し得ない。總體生活に對する認識は必ず總體意志に即き、その意志の自覺内容たる意識から出發しなければならぬ。然るに總體の構成成分たる個人意志では總體意志を味識し得ず、従つて總體そのものを知り得ない。總體意識を分裂せしめる境涯に住む所の階級意志もまた總體意

志を知らない。かくて總體としての國民團體生活を見るものは唯だ國民意志あるのみ。また總體としての世界團體生活を見るものは唯だ世界意志あるのみ。これらの意志は對境相應の意志であり、これによつてのみ始めて對境が明確に實在として眼界に現はれるのである。

世間生活に關する科學では人生の分界に於ける生活主體が何であるかによつて種々の科學が成立する。また各分界の地位如何によつて研究主體と研究對境との適應關係を異にするが、この關係を正たすことが現代に於ける世間科學の進歩を語るものである。そこに國民科學や世界科學の成立が要求されて來る。社會學はもと形式的研究と綜合的研究との未分狀態に於て成立したが、次で形式社會學が現はれてこの科學に一大進歩を齎らした。この時に形式社會學のみにては嫌らぬと考へることは當然であるが、決してこれを輕視してはならない。形式社會學の成立は綜合社會學の成立を豫定する。先づ形式を明かにして後に如何に形式が内容を盛るかを尋ねることは世間科學研究の順序であらう。されどそれにしても從來の社會學は抽象的社會生活に偏して、具體的なる國民生活及び世界生活を看過してゐる。そこに社會學の行詰りが生じ、且また社會學は實踐生活に何等の指導力を持たないと言ふ批難が起る。從來の社會學者は極めて少數を除いては概して個人主義認識論の上に立つてゐるから、國民生活や世界生活を如實に見ることが出來ないで二者の區別さへよく解らない。在來の社會學は概して概念科學であり、實境科學となつてゐない。數學や論理學のやうな本來の概念科學は別として、實境科學たるべき世間生活の研究を概念

的に取扱つたのでは、それは實境科學研究の道具を供給するに止まり、科學自體は成長し得ない。國民科學と世界科學とは實境を見る所の實境科學であり、その中でも世界生活は唯一無類の實境であるから、これに就ての研究は明かに唯一の實境をそのままに受取るものであり、概念科學として考へられる餘地がない。されど國民科學にあつては多數の國民生活が實在するから、やゝもすれば國民を概念的に取扱ふとする從來の惡癖が生じ易い。この場合にも道具としての概念は必要であるが、それは求める所の智識ではない。國民科學は一々の國民毎に成立する具體性の智識體系である。この場合に具體性の科學は歴史と如何に區別されるかを疑ふものもあらう。併しそれは法則が本來、現實に即くべきものであり、眞理は常に具體なることを知らず、且また人間生活の發展を見る研究に於て史論と理論との別あることを知らないからである。國民科學が具體性を持つ一例を舉げるならば、十八九世紀に現はれたイギリスの經濟學・政治學・倫理學などは、イギリスの學問とも言はれるほどに國民性格の所産と見られ得る。唯だ國家を忘れたやうなイギリスの個人自由主義學者は、殊更にイギリスの學問なることを斷らないで恰も各國民に通ずるかの如く自分達も誤解し他人をも誤解せしめた。そこでイギリスの經濟學を輸入して大學の講堂にて放送しつゝあつたドイツの教授達は、マルクスから嘲笑され、リストから叱責された。日本では明治の初期に於て英國流の自由貿易を主張したり、議會が出来れば英國流の政黨政治が憲政の常道であると考へるやうな非學者を生じた。かゝる誤謬を矯正するものは國民科學であり、國民

科學は具體的なる國民生活を研究する科學であり、日本國民は主として日本國民科學を研究することが研究法の根本的約束に従ふ所以である。かく考ふるときに現實に即する國民科學が樹立されるが、その時始めて國民科學以外に世界科學が存立しなければならぬと言ふ理由が明かになつて來る。漫然と世界社會を見渡した所で、そこに科學的研究の立脚地が無ければ世界生活相は現示されない。先づ國民科學を承認し、次でこれと並行しながら而かも異なる所の對境に相應する立場をとるとき、始めて世界生活の科學的研究が可能となるのである。

五

國民科學は國民意志の立場から國民生活を見るものであるが、その立場からは世界生活を見るに適しない。國民意志の見る世界はその斷層に過ぎない。政策問題でも、例へば移民に就て日本側から見ると米國側から見るとは、各々對向的に一線を見るのであつて始末が付かない。國民意志が已に然うであるから、個人意志から世界生活を見るなどは全く問題にならない。階級意志は國民生活を見る場合にさへ不適當であるから、世界生活を見るには一層不適當である。世界生活に於ても階級對立は認められるも、こゝでは各階級の意識的結束が國內ほどに確立してゐない。その上に世界生活を横斷する萬民的階級對立は更にこれを縦斷する國民の對立によつて牽制せられ、殊に國交斷絶期に於ては萬民的階級帶は切斷される。現に世界大戰當時に於ける階級科學は甚しい意識分裂の情勢を示した。かゝる不確實なる階級の立脚地から世界生活を見ると言ふこ

とは決して對境への認識を確實ならしめる所以でない。更に階級的見地は、同じく階級對立を見るときも、國民生活に存するものと世界生活に存するものとの差別なく考察し且つ一々の國民毎に階級對立の實勢及び意義を異にする點を輕視するから、勢ひその見解は概念的・公式的のものとなつて實踐的研究に於て甚しい錯過に陥るのである。かくて世界生活を見る立場は唯一の世界意志の外にはあり得ない。

世界意志の立場をとると言ふは、研究者が世界團體意志に即して世界生活を觀察し思索することである。その世界團體意志は現在に於ては國際團體意志に外ならぬ。萬民交通は個人の相互關係たる社會を成すまでにて共同組織を持たないから、そこには團體意志は成立しない。これまで世界主義を執るとか世界人であるとか考へてゐる人々は、實は國民團體を否定し従つて國際團體を否定する萬民社會主義又は萬民社會人に外ならないもので、そう言ふものは眞の世界主義でも世界人でもなく、また世界生活の真相に對しては全く盲目的なる無識者である。

世界生活體系に於ては、國際團體が萬民社會の上に立つて世界團體を支持し、國際團體意志が世界團體意志となつてゐる。その構造は恰も國家が市民社會の上に立つて國民團體を支持し、國家意志が國民團體意志となつてゐるのと相類してゐる。但し國際團體意志は國家意志に比べて甚しく幼稚微弱なるのみでなく、意志の内容たる目的も性質的に異つてゐる。意志一般に就て見るに、それは衝動力たる自然力から觀念力たる意志力に進化し行くものであるが、意志の發展階段

に於ては、先づ衝動力を統制する作用が現はれ、次で衝動力と明かに質を異にする創造の作用に進む。後の階段に於て意志の面目を發揮し、前の階段は未熟の意志に止まるが、しかし衝動力を統制する作用も亦目的觀念の下に行はれ、質に於て自然力と異なる。これを團體意志に就て見るに、國家意志は民族的衝動力の自覺の上に市民參政の工作を加へて意志性が明確に看取される。然るに國際團體には民族の如き原始的共同體なく、國民間の相互交通が發展して共同利害を生ずるに及んで共同組織を生じたるものであるから、現在の國際團體意志は國家意志が統一意志なると異り、國民團體を結ぶ聯合意志に止つてゐる。従つて意志内容としての生活目的も、一が意識的に市民社會をも統制して國民的生命の發展を目標とする國民意志なるに比べ、他は意識的に諸國民の共存共榮を計る調整を目指し、また極めて粗放的ながらも萬民社會に對して調整の任務を執る所の世界意志となつてゐる。斯の如く世界意志は國民意志に比べて甚だ未熟であり、意志發展の前階段に屬するものであるが、しかしそれでも意志はやはり意志であつて、盲目ではない。我等がこの意志に即くとき始めて正面に全面的に世界生活を見得る所の眼が開かれる。五尺の小身も高山に登れば大平野を展望し得る。

世界生活現象が全く盲目的なる自然運動現象に過ぎないならば、これを見るには個人眼・階級眼又は國民眼を以てする外はない、しかしそれでは正しい認識は期待されない。世界生活の出現と殆ど同時に世界意志が生成し始めた。それに立場を求めることが世界生活を如實に見る唯一の

途である。然らば、我等をして世界意志の立場を執らしめる所の世界意志の實在は如何にして知られるか。それは種々の分界意志の實在を知らしめると同様に、意志は自覺によつてのみその實在を示すのである。意志が意志を見るに當つても、人生の分界を見るとときには、見る意志が分界意志として規定されることを要する。世界科學は世界意志の規定を受けて成立し得る。

六

今まで行はれたる個人科學及び階級科學では負擔に堪えなかつた所の國民生活及び世界生活の研究は、新たに興る國民科學及び世界科學の肩上に移される。前の二つの科學は謙虛の態度を以てそれぞれ在るべき地位に止まり、これまで占有して居つた廣過ぎる座席は、これを後の二つの科學に譲らなければならぬ。

國民科學と世界科學とが成立するに及べば、これまで所屬の曖昧であつた研究問題の如きも、問題の規定如何によつて或は國民科學に或は世界科學にそれぞれ配置せられて、その領分に安堵することが出来る。例へば植民地問題を擧げるならば、已に領有され居る植民地に於ける拓植政策及び統治政策の如きは國民在內生活の問題として、また植民地の獲得又は拋棄の如きは國民對外生活の問題として、孰れも國民科學の擔任に屬する。然るに世界に於て諸國民が植民地を爭奪する帝國主義の競争又は戰爭の如きは世界一般の問題として、また富源地帶としての植民地は諸國民の間に如何にこれを分屬せしむべきかと言ふが如きは對各國民の問題として、孰れも世界科

學の研究に付せられる。自國領土に於ける植民政策の研究に對して帝國主義論を吹きかけたり、或は世界社會現象たる帝國主義運動に對して國民的見地から説明を加へたりするやうなことは、孰れも植民地と言ふ共通概念を捉へて概念科學的考察を試みるものである。また貿易及び爲替の研究の如きも、對外貿易又は對外爲替と國際貿易又は國際爲替とは、政策研究は勿論のこと、事實研究でも見る方向を異にする。それは對外自由貿易と國際自由通商との相違を擧げるだけでもよく知られる。日本の國際貿易など言つては何のことか解らなくなる。また一國外交と國際政治との別や涉外國法と國際法との別の如きも同様である。要するに國民のものは國民に、世界のものは世界に與へて、二つの科學の職分を明かにすることが肝要である。

國民科學と世界科學とは互に補足的關係に立つ。一を承認すれば他をも承認することとなる。世間には衆人の前にて、大にしては世界人類の爲めに、小にしては日本國民の爲めになど大聲を發する者が少くない。こう人々は國民の事も世界の事も解らないものである。また世間にはプロレタリアには祖國なしと叫びながら、ブルジョアにも祖國のないことを知らない人々がある。これとても亦祖國をも世界をも共に知らないものである。人々は或は上の如き個人主義又は階級主義の見解が國民又は世界の實生活にとつて危険であると感ずるかも知れない。しかし我等はそれよりも先きに、かゝる世間科學研究法の根本約束に背く見解が、眞理を求めると途上に横はる所の最も甚しい危険物であることを指摘したい。